
機甲戦記

nakumoto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機甲戦記

【Nコード】

N4779Z

【作者名】

nakumoto

【あらすじ】

戦場にいる少年兵士はある夫婦に出会う。それは少年のこれからの人生を大きく変化することになる。少年は戦場で何を思い何を掴むのだろうか……。

プロローグ（前書き）

小説を書くのは初めてですので、色々とおかしな点が多々あるかと思いますが、直せる範囲で直していきたいと考えています。

一応ロボット物を目指しています。あと、タイトルは一応仮題です。そのうちいいのが思いついたら変えます。

プロローグ

技術の進歩は一体何に引き起こされるものだろうか。

偉大な科学者の発明？ 先端技術の解明？ 研究の成果？
どれも違う。

人類の技術の進歩とは戦争によって作り出されたものだ。
いかに人を効率よく殺すか、そして味方の被害を最小限に敵の被害
を甚大に。

すべては戦争のため、争いのため、軍事力のため。
人は争い続けることで自らを昇華していく。

技術の進歩というのは戦争から生まれたものである。

そして、物語は戦場から始まる・・・

第一話「戦場の救い」(前書き)

本編といってもまだまだ最初のほうの話です。

第一話「戦場の救い」

ここはどこだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。

俺の名前は・・・？

いや、名前など必要ない。

ここにいる目的は？

敵を殺す、それだけだ。

なぜ？

ここが戦場だからだ

ヒュードオオオオン

地鳴りと土煙が舞い砲弾が落ちてきた

恐らく敵の野砲だろう。

あるいはミサイルか

とりあえず一箇所に留まるのは危険だ、移動しよう。

俺は持てる装備を確認した

武器はアサルトライフルにハンドガン

そしてロケットランチャーがあるが、弾は2発しかない。
おまけにこいつは重くてかさばる、これは置いていこう。

左右の腰には長めのナイフが1本ずつ計2本差してある。
やはり、こいつらが一番扱いやすいな。

俺はにやりと笑みを浮かべた。

銃を撃つのもいいがやはりナイフが一番いいと自分では思っている。
とりあえず西にでも向かおう。そう決めて路地を出たときソレに見
つかってしまった

ソレは身の丈約15、6メートル

足があり、手もついているが頭はなく、代わりに装甲板で覆われた
操縦席がある

元々は作業用ワーカーだったものを改造し両手に機関砲を装備し、
肩にはロケットランチャーが付いている

やばい、こいつはやばいのに出くわしてしまった。

戦車より安価で改造しやすくなにより機動性がいい（戦車より）
通称、機甲兵器。

1

最初は極東の地で開発された
画期的で斬新かつ機動性に優れ安価で操縦も容易い
作業効率も従来の倍はよくなる。

そんな夢の重機。

しかし、その構造を他の国は黙って見ているわけがなかった。

原理を研究し、技術を盗み、真似して兵器へと変えていった。

そして戦争は変化した

↓

さっきのランチャーを持ってくればよかったと後悔したが、そんな考えは吹き飛んだ。

目の前にいるとはまたもう二機後ろから近づいてくる。

機銃がこちらを向く

走った、全力で

武器も装備も邪魔だ

ガガガガガガガガッガガッガ

狙いがあまい？ いや、違うな楽しんでいるのか。

人間狩りを・・・。

余計たちが悪い

逃がしてくれはなさそうだ

なんとか狭い路地に逃げ込めば・・・！

パシュッ！ ヒューウウウウウウ

嫌な音が後ろから聞こえた

爆発が起きる瞬間、俺は無意識の内にありたっけの力を足にこめ跳

んだ

そして意識を失った

side

俺は自分の名前も出身も両親すらわからない

気づいたら戦場において、敵と戦ってた

敵がどんな敵かはわからない

強大な敵とだけわかるが、考えてもきりがない

銃の扱いとかも傭兵の人とかに教わったがそれ以前に使っていたものがある

それはナイフだ

一番最初に使った武器

敵の懐に入り一撃で仕留める

静かで音もなく

そしてなにより軽い

1本でもいいがやはり2本だ

同時に二人までならやれる、得意技の一つだ

しかし、たまに思うことがある

俺は何のためにここに存在するのだろうか・・・？

side END

暗い、視界がゼロだ

声が聞こえる

ああ、そうか

目を塞がれてるのか

手も足も動かないな

そこは切れそうな電球が鈍く光る小さな部屋

両手両足は椅子に縛られ目隠しをされていた

周りに人の気配はないが、隣の部屋からだろうか声が聞こえる

「なぜ、殺さなかった！」一人の褐色の男がもう一人の男に怒鳴った

「まあ、まあ、そういきり立つなよ・・・」もう一人の男が笑いがらなだめる

「いいか？俺たちはいい拾い物をしたんだぜ？」壁際にいた男が諭すように言う

「拾い物だと・・・？あんなガキ拾っても意味ないだろう！」

「やれやれ、知らないのか？あのガキ」

「何？」

「あのガキは政府軍から手配書が出てる砂塵の牙だぞ？」

「さ、砂塵の牙だと・・・？あんなガキが？」

「そうさ、顔はそっくりだし、なにより特徴あるナイフも2本持っていた。間違いない」

「仮にそうだとしても、なぜ生かして捕まえるんだ？」

「いいか、政府軍は反乱勢力を弱めたい。しかし、英雄的存在である砂塵の牙で反乱軍は調子に乗り勢いついている。もし、あいつが政府軍に捕まり宮殿の前で公開処刑されたらどうなる？」

「そ、それは・・・」
今まで怒鳴っていた男が黙る

「反乱軍は英雄を失わないように救出に来るだろう、全力でな。それを狙っているのさ」

「まさか、主要な反乱勢力をつぶすために？」

「そのとおり！」

「そして、俺たちも懸賞金や貢献金ももらえ大儲けってことよ！」

ガハハ、笑いながら褐色の男が言う

そんな計画が隣の部屋から漏れてきた

だが、俺にはどうすることもできない、ただ、死を待つまでだ

何時間かたったのだろうか・・・

外が騒がしい。

なにおおきて・・・

ドン！

ダダダダダ！

銃声が止んだ

人が近づいてくる音がする

「おい、話が違うぞ？」

誰だ・・・？

「あら、情報が間違っていたのかしら。こんな子供が捕まっているなんて聞いてないわ」

男と女・・・？

しかし、一体なにが・・・

「どうする？」

「どうするって、あなた。助けるしかないじゃない。」

手足が開放される、マスクが取られる

視界がぼうつとして女の人の顔が見える

頬に大きな傷跡がついてる

隣には左目に眼帯をした男が見えた

「あなた、名前は？」

女が話しかけてきた。

俺は戸惑いながら答える。

「名前は・・・ない・・・」

女は一瞬驚いた顔を見せたがすぐに真面目な顔に戻った。

「名前がない？じゃあ、あなたは一体何者なの？どうしてここに？」

「よくわからないが、手配書に載っていたので捕まったらしい」

「手配書・・・？あなたが？」

「ふむ、恐らくこれだな。」

隻眼の男が床に倒れている男の懷から紙を取り出した。

「これは・・・砂塵の牙？まさか、あなたが・・・！？」

「そうも、言われている。でも、名前がないのは本当だ。」

俺の言葉に二人は顔を見合わせた。
そして・・・

「こんな子供が砂塵の牙だったとはな・・・。」

「ねえ、ちよっと考えがあるんだけど？」

「お前の考えはいつも嫌なことにならん。が、なんだ？」

「砂塵の牙はもう今では反乱軍で英霊扱いされていることだし、この子をうちの子にしましょう！」

「・・・はい？」 「・・・ハア？」

男と俺の言葉が重なった

「お前正気かよ・・・。」 「ちよ、ちよっと待ってください？」

あきれる男とあわてる俺

しかし、女は強引に話を進める

「まあ、これも運命ってやつだな」なぜか納得する男

「しかし、いつまでも名無しじゃなく・・・。」

「名前ねえ、何もないってことでゼロはどう!？」

「安直すぎだろ・・・。もっとひねろうぜ」

うーん。。。と二人して考えこむ

なぜか俺を無視して俺の名前を真剣に考え始める二人

あれ、おかしくね？

ってかまだ俺了承とかしてないんですけど・・・？

「あのうー・・・」

「・・・」

「・・・」

・・・。

無視かよ！

「ゼロ・・・レイ・・・レイ・・・」

ゼロから離れろよ・・・。

っていうかそれでいいよ、もう

男がチラッと時計を見た

時計はちょうど12時をさしている

「レイジにしよう！」

「それ採用！」

おいしい、てめえも安直じゃねえか・・・。

「じゃあよろしくね、レ・イ・ジ」

こうして俺は初めて名前をもらい家族ができた

第一話「戦場の救い」(後書き)

主人公の名前いいのが思いつきませんでした・・・。

第二話「スクール」(前書き)

歴史的な設定を追加、周辺各国の状況の確認みたいなものです。参
考程度に。

第二話「スクール」

地球暦現代史

地球暦

1095年7月、スメラギ皇国が世界初の二足歩行型作業ロボ「ドールワーカー」を発表。

1096年6月、第三次メリジア紛争勃発。

1097年1月、連合国軍の猛攻撃により紛争が沈静化。

1100年8月、紛争時にゲリラが武装改造したドールワーカーを戦場で使用されていたことが発覚。

これにより、先進国が競ってドールワーカーを軍事に開発を始める。

1103年2月、アメリカ合衆国がドールワーカーを軍事的に改良したDTドールトルパーを発表。

その戦闘力の高さに軍事バランスが揺れ動く。

1105年5月、突如、アメリカ合衆国が地球統一国家を提唱。この説に対し、東エイジアを統括する

中華人民連邦が反発。自分の領土拡大のためスメラギ皇国に対し圧力をかけ始める。

1106年4月、そして――――

白い突起物が無数に生えている。

すべてが同じ形で同じだ。

ここは死者が眠る丘。

そのうちの一つに一人の青年がひざまづいている。

墓の前には種類の違う花が2輪。

「これでお別れかな・・・」

青年が優しく語り掛けるように話す。

「オレをここまで育ててくれた、父さんと母さんの命は無駄にはしない」

命を救ってもらい、知識を、技術を、教養を、すべてを教わった。

兵士の道を行くと決めたときも反対はされなかった。

むしろ、英雄になってこい！と、励まされた。

入校式の自分の姿を見せることができなかったのは一番残念だったが・・・。

「じゃあ、もう行くよ」

最後の別れを済ませる。二度とここには戻ってこないだろうから。

青年は立ち上がり、墓地を去る。

その顔には涙はなく、悲しみもない。あるのは決意した目だけだった。

バスに1時間ほどで着いた。

ここが合衆国陸軍パイロットスクールだ。

ここ数年で軍の兵器は急速な変化を遂げた。

それがDTだ。戦車以上の火力と機動力で戦場を駆ける、機動兵器。

精密機械の集合体でもあるこの兵器はパイロット一人が搭乗して動く。そのため、パイロット育成こそが急務なのだ。

人が多い。みんな同年代か。

しかし――――

学校というものはこういうものなのか？教わったものとはだいぶイメージが違うなあ。

校長とかいう長い話が終わり、教室にいるのだが・・・騒がしい。

DTを早く操縦したいとか、旧式DTに乗っていたことがあるとか、そんな感じだ。・・・つまらん

「静粛に！」

いきなり教室に入って来た人が声を上げる。

「今日から諸君の教官にあたる、ゴーズだ。パイロットスクールだからという甘い考えは捨てろ！諸君らは兵士になるのだからな。返事はどうした！」

「サー、イエッサー！」

今まで騒いでいた連中が一斉に返事をする。

ふむ、やはり、こうでないとな。

「と、まあこんな感じでいくと疲れるからな。とりあえずこれから寝食を共にする仲間なんだ。自己紹介でもしてもらおうか」

え？おいおい、いいのかよ。そんなことってあんたは教官だろうが。

調子狂うわー、とか思っていると順番が回ってきた。

「次！」

「はっ！自分の名前はレイジ・アスカールであります！以上！」

名前だけ答えて着席しようとするのと止められた。

「ん？待て、名前だけか？趣味とかは？」

趣味聞いてどうするんだよ・・・。

「いえ、自分はこれといって趣味はありませんので・・・」

「特技とかは？ほら、なんかないのか？寂しいやつだな」

「いえ、そういったものはなにも・・・」

「ふーむ、まあ、いい。次！」

なんなんだよ、
いたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4779z/>

機甲戦記

2011年12月24日00時51分発行